

『平家物語』 小宰相身投への一視点

四 重田 陽美

はじめに

平安時代の貴族の精神生活の根底を支え、大きな影響を及ぼした仏教においては、「殺生戒」つまり、生ける者を殺すことは強い戒めであった。その意味では、闘いによって自らの存在を成す武士は、仏教とは相入れぬ存在であった。が、『平家物語』においては、その武士にも極楽往生の可能性を示している。処刑や入水自殺の前に、心静かに「経読み、念仏する」ことによつて、中には救われた者もいると語るのである。例えば、高野山で聖となつた齊藤滝口時頼にも、入水の直前になつてまだ妻子への妄執の捨てきれない維盛に対して次のような事を語らせている。

源氏の先祖伊豫入道頼義は、勅命によつて奥州のゑびす貞任・宗任を攻めんとて、十二年があひだに人の頸をきる事一万六千

人、山野の獸、江河の鱗、其いのちをたつ事いく千万といふか
ずを知らず。されども終焉の時、一念の菩提心ををこしによ
つて、往生の素懷をとげたりとこそうけ給はれ。就中に、出家
の功德莫大なれば、先世の罪障みなほろび給ひぬらん。……中
略……つみふかゝりし頼義、心のたけきゆへに往生をとく。さ
せる御罪業ましまさざらん、などか浄土へまいいり給はざるべ
き。……中略……たゞふかく信じて、ゆめゆめ疑ひをなし給ふ
べからず。

(日本古典文学大系『平家物語』下^① 卷第十 維盛入水)

(以下、日本古典文学大系は、大系本と略す)
一万六千人の人を殺した頼義でも、心強く道を求めたために、極
楽往生できたと説く滝口入道の言葉に妄念を翻した維盛は、念仏を
唱えながら海に入るのである。

ところで、この「殺生戒」は、他人の命を奪つ事への戒めであると共に、授かつた自らの命を断つ事への戒めでもある。したがつて自殺は許されるものではない。にもかかわらず、『平家物語』においては、右に挙げた維盛のように、入水という形で自らの命を断つ人々が幾人か描かれている。

維盛たちと時代を同じくする、平安時代の貴族たちは、様々な苦難に晒されるたびに、死を願ひ、しかし、自らの命を断つ事が出来ずに、苦しんだ。例えば、少し時代はさかのぼるが、『更級日記』においても、康平元年（一〇五八）十月、夫俊通の突然の死の後に、次のような記述がある。

さすがに命は憂きにも絶えず、ながらふめれど、のちの世も、思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、

（日本古典文学大系『更級日記』）

この世で、どれほど死にたいと思つても、「思ふにかなふ」ことなく、ながらえてしまうように、きつと来世も、自分の願つようにはならないだろうと、作者は述懐している。命に限らず、自分の願つようにはならないのが世の中であるという認識が主流の時代において、自らの命を、自らの意志で断つてしまう人々を、『平家物語』ではどのように描き、それによつて、何をあらわそうとしているのか。ここで、『平家物語』における「入水」に関して、考察を

加えたいと思う。

第一章

まず、覚一本系の『平家物語』に描かれる、これら入水自殺を選ぼうとした人々を列挙してみる。

覚一本系の『平家物語』において、初めて、「身をなげん」という表現があらわれるのは、巻第一「祇王」においてである。白拍子の仏御前の出現により、清盛のもとを追い出された翌年、祇王のもとへ、清盛からの呼び出しがある。祇王は、心ならずも再び清盛のもとを訪れるが、非常に粗略に扱われ、つらい思いを抱いて帰路につく。そして母親に語るのである。「親の命をそむかじと、つらき道におもむひて、二たび憂きめを見つることの心憂きよ。かくて此世にあるならば、又憂きめをも見むずらん。いまはたゞ身をなげんと思ふなり」（大系本『平家物語』上『巻第一 祇王』）。妹の祇女も、「あね身をなげば、われもともに身をなげん」（同右）と言う。これを聞いて、母も、二人の娘に先立たれては生きていけないので、自らも身を投げるつもりだが、それは二人にとっては母を殺す事になるので、五逆罪になってしまうと嘆く。結局、母の嘆きに、入水を思いとどまつた祇王は、妹の祇女、母と共に出家する事になるが、これは、仏教の教えから見れば、非常に望ましい展開であるといえ

よう。

また、次にあらわれる俊寛僧都についての叙述においても、ただ一人鬼界が嶋へ残された俊寛が、翌年苦難の末に会いに来た有王に、「去年少将や判官入道に捨られて後のたよりなき、心の中をばたをしはかるべし。そのせに身をもなげむとせしを」（大系本『平家物語』上『巻第三 有王』）と語るが、これも、艱難辛苦に絶えつつ、身を投げることは考えても、結果としては、入水してはいない。

『平家物語』において、初の入水は、重盛の三男清経である。

小松殿の三男左の中将清経は、もとより何事もおもひ入れたる人なれば、「宮こをば源氏がためにせめおとされ、鎮西をば維義がために追出さる。網にかゝれる魚のごとし。いづくへゆかばのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあらず」とて、月の夜、心をすまし、舟の屋形に立出でて、やうでうねり朗詠してあそばされけるが、閑かに経よみ念仏して、海にぞしづみ給ひける。男女なきかなしめども甲斐ぞなき。

（大系本『平家物語』下『巻第八 太宰府落』）

その後、越前の三位平通盛の妻小宰相の身投げ（巻第九）、小松の三位中将維盛の身投げ（巻第十）、壇ノ浦の戦いに平家が敗れた事による安德帝の身投げと、それに続く女房たちや、平家一門の武士教盛・経盛兄弟、資盛・有盛兄弟といこの行盛、能登守教経、

知盛と乳母子の家長の入水が描かれる（巻第十一）。

『平家物語』に最後に描かれる入水は、巻第十一の「副将被斬」である。平宗盛の次男副将が六条河原で斬られた後、副将の世話をしていた乳母と世話係の二人の女房が、源義経に副将の頸を乞い、数日後、桂河に身を投げる。

一人、おさなき人の頸をふところにいだひて沈みたりけるは、此わか公のめとの女房にてぞありける。いま一人むくろをいだひたりけるは、介錯の女房なり。めのとが思ひきるは、せめていかゞせん、かいしゃくの女房さへ、身をなげけるこそありがたけれ。（大系本『平家物語』下『巻第十一 副将被斬』）

これらの入水は、入水を選ぶ状況に応じて、次のように三つに分類することができる。

- I 敗戦により、敵の手に掛かる前に死ぬための手段
- II 現実世界への絶望により、現実逃避のための手段
- III 先立たれた人の後を追うための手段

まず、現代社会に生きる我々にとつても最も理解しやすい入水といえ、Iの場合であろう。先に挙げたものでは、巻十一に描かれる、安德帝・二位尼、建礼門院や女房たち、平家一門の武士教盛・経盛兄弟、資盛・有盛兄弟といこの行盛、能登守教経、知盛と乳母子の家長の入水がこれに当たる。

壇ノ浦という、海に囲まれた場所での敗戦の結果、生け捕られた者と逃げ落ちた者を除けば、平家の一門たちは、闘って死ぬか、海に身を投げて死ぬかの道を選択することとなった。闘って命を落とす場合と異なり、海に身を投げる死は、武士の魂ともいえる武具を用いての死ではない。それは、木曾義仲を庇い続け、死処を共にしようとした乳兄弟の今井四郎兼平が、義仲の死を耳にして、「いまはたれをかばゝむとてか、いくさをもすべき。これを見たまへ、東国の殿原、日本一の剛の者の自害する手本」(大系本『平家物語』下巻第九 木曾最期)と叫び、刀の切っ先を口に含んで、馬から逆さまに飛び落ちて死んだ様な、武士としての死ではない。

義仲・兼平と同じく、乳兄弟と死を共にした新中納言平知盛の姿に対照的に表わされるように、心通い合った者同士、浮かび上がらないように鎧などを着こんで、手に手を取って海に身を沈める、悲愴感が漂いつつも、諦念の通った心静かな死である。死を選ぶことを余儀なくされた平家一門の人々にとって、目の前は海は、まるで、彼らを受けとめる大らかな、かなたの世界へ通じる場であるかのよう映ったのであろう。

Ⅱの場合については、最初に挙げた重盛の三男清経の入水が、これに当たると考えられる。京都からも九州からも追い出され、八方塞がり、閉塞状態の中、生きる道を見失った清経の入水は、人々の

涙を誘うが、この場合もまた、横笛(やうでう)を吹き、朗詠し、心静かに念仏を唱えながら海に身を投げる清経の姿には、来世における幸せが約束されているかのようである。

Ⅲは、最後に挙げた副将の乳母と世話係の女房の入水である。『平家物語』の作者は、乳母の決断を、「いかがせん」と、乳母の立場であればどうしようもないことだとし、世話係の女房までも入水したことは、「ありがたけれ」として、めったにないことだと結ぶ。しかし、立場の違いに関係なく、乳母と世話係の女房にとっては、副将は自らの命に等しい存在だったのであろう。副将と共に過すことがすなわち生きることだった一人は、副将の死に直面して、現実世界への執着を失ってしまった。そして、副将の頸と胴体をそれぞれ抱いて入水することによって、副将と共に死の道を進むことを選んだのである。

『平家物語』において、このⅠⅡⅢの入水は、水葬を彷彿とさせる。すでに、この世に有りながら精神的には死んだも同然の彼らにとって、入水は、命を絶つ「殺生」のではなく、自らの肉体をどういった形で葬るかの選択に過ぎない。

ところが、こういった入水と表面上は似ているようで、どこかに不審な点を残す入水が、『平家物語』には描かれている。それは、重盛の嫡男維盛の入水と、越前三位中将通盛の妻の小宰相の入水で

ある。

維盛の入水について、『平家物語』巻十では、都に残した妻子を恋しく思い戦線離脱するところから、結局京都へ戻ることをあきらめて妻子に一目逢つこともなく熊野の沖へ入水するに至るまで、一気に書き綴っているが、史実がどうであれ、妻子を陰ながら見ることもせず、熊野へ向かう維盛には、現実世界への執着は強い。熊野の沖で、最後に念仏を唱えた際も、「あはれ人の身に妻子といふ物をばもつまじかりける物かな。此世にて物をおもはするのみならず、後世菩提のさまたげとなりけるくちおしさよ。只今もおもひいづるぞや。かやうの事を心中にのこせば、罪ふかからんなるあひだ、懺悔する也」(大系本『平家物語』下、巻第十 維盛入水)と、滝口入道に懺悔して、本稿冒頭の、滝口入道の「源氏の先祖云々」の発言につながった。物語では、滝口入道の言葉に「忽に妄念をひるがへして」入水する維盛の姿が描かれるが、維盛の入水への過程は、先に挙げたⅠⅡⅢの、精神的には死んだも同然の人々の入水とは趣きが異なっている。

また、小宰相は、最愛の夫を失ったとはいえ、身近に同じ立場の女性たちは多く、皆出家して亡き夫の菩提を弔おうとしている。その上、小宰相のお腹の中には、通盛の子が宿っている。それにもかかわらず入水を選んでしまつ。結果的には、自分のみならず、お腹

の子供の命まで「殺生」する事になる行動に走ってしまった小宰相を、『平家物語』は何故描いたのだらうか。小宰相の入水は、先に挙げたⅠⅡⅢの入水のように、水葬を彷彿させるものではない。何故なら、仮にそれが事実であつたからといつても、海から引き上げた小宰相を、再び水葬する場面を描いているからである。

この二人の入水のうち、維盛の入水については、戦線離脱に至る事情、熊野と小松家の関わり、また、熊野における補陀落信仰の影響など、様々な要素が含まれていると考えられ、より一層の考察を経て、別稿に述べることにしたい。ここでは、小宰相の入水について検討する。

第一章

『平家物語』の「小宰相身投げ」には、諸本によって多少の異同が見られる。残念ながら『太山寺本』『屋代本』などのような一部の諸本には、小宰相身投げの記事そのものが欠落しているが、これら以外の多くの諸本が、小宰相と越前三位通盛の出会いを和歌をも交え、かなりの紙面を割いて語っている。本稿においては、『延慶本平家物語』(以後『延慶本』と略す)を中心にして、小宰相が、越前三位通盛の戦死の報せを受けてから、入水自殺に至るまでの経緯を追ってみる。

『延慶本』第五本の三十では、通盛の正妻が、清盛亡き後の平家一門の総大将である平宗盛の娘であることを明らかにし、この正妻に遠慮し、通盛とは深い愛情で結ばれているにもかかわらず、小宰相が通盛や平家に関わる他の女性達とは別の船に起居していることを記す。読み本系と呼ばれる諸本の内、『源平盛衰記』『長門本』『南都本』『南都異本』『四部合戦状本』もほぼ同様である。しかし、『源平闘諍録』は、通盛の北の方と紹介し、「波の上、船の内にても一日片時なれども相ひ離れず」と二人の愛情の深さを強調し、語り本系の『覚一本』(『大系本』)や、『百二十句本』『平松家本』『高野本』『両足院本』でも、小宰相を通盛北の方と記すだけなので、小宰相が通盛の正妻であるかのように受け取られる。

『延慶本』をはじめ、読み本系と呼ばれる諸本の多くが、通盛の正妻が平宗盛の娘であることを記すのは、単に情報収集力を誇るためだけであろうか。それとも、共に都を離れた多くの宮廷女房たちと離れ、別の船でひっそりと起居する小宰相の姿を描くことには、何らかの意図があるのだろうか。『覚一本』にはないこの叙述が、『延慶本』の中で担う役割があるのではないだろうか。そしてこれが、小宰相物語とも呼べる一つの物語の中で、小宰相の入水の理由を示してはいないだろうか。この点について後に検討することにして、さらに経緯を読み進めてみたい。

さて、通盛の戦死を知らされ、小宰相は「シバシハ物モ言ワズ、引カヅキ臥臥又」といった状態で、食事どころか飲み物さえものどを通らない。四五日経った後の運命の十三日、ようやく小宰相は乳母子の女房に自らの決心を語り始める。今回の戦闘へ赴く前夜の通盛の様子、懐妊を告げた時「アワレ同八男子ニテアレカシ」と言った通盛の喜び、船内での出産に対する通盛の不安、こういったものは、諸本がほとんど同じ形で記載している。その後、小宰相は女房相手に自らの不安を口にするのである。

A 出産の危険性

誠ヤラム、女八身々トナル時、十二九八死ルナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカクナラム事モ口惜シ。

B 再婚の運命が待ち受けているのではないかとの不安

若此世ヲ忍過テナガラヘテモ、有八心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議ニテ思ワヌ外ノ事モ有ゾカシ。心ナラスサル事モ有ハ、草ノ影ニテ見ム事モハツカシケレバ、此ノ世ニナガラヘテモナニカハセヌ。

C 菩提を申う依頼

若サモ有ム時ハ、ワラワガ装束ヲバ何ナラム僧ニモトラセテ衣ニセサセテ、後生ヲモ問ヒ無人ノ菩提ヲモ助給ヘ。

D 都の親族への連絡依頼

書置タル文共ヲバ都へトツケ給ヘヨ

この4点の不安や依頼を語り、海に身を投げたいと望む小宰相に
対して、乳母子の女房は不安を覚えつつ、次のように反論する。

a 夫に先立たれても、身投げした人はいないこと

其上御身一人ノ事ニテモナシ。薩摩守殿、但馬守殿、若狭守殿、
備中守殿北方達モ、御歎何レモヨロカナラズ。サレドモ方々御
サマヲ替テ、後生ヲコソ訪進サセ給ヘドモ、御身ヲ投ル人モナ
シ。

b 生まれ変わっても通盛に逢えるとは限らないこと

必ズ同道ニテ思食ドモ、生替セ給ナム後ハ、六道四生ノ間ニ、
何ナル苦ノ道ヘカ趣カセ給ヌラム。行達マヒラセサセ給ワム事
モ有ガタシ。

c 出産して子供を形見とする事への勧め

イカニモシテ平ラカニ身身トナラセ給テ、少人ヲモソダテ奉テ、
ナキ人ノ御形見トモ見マヒラセサセ給ヘカシ。

d 出家のすすめ

ナラアキダラズ思食バ、御サマヲモ替サセ給テ、イカナラム山
寺ニモ閉籠ラセ給テ、閑ニ仏ノ御名ヲモ唱テ、故殿ノ御菩提ヲ
モ訪マイラセ、我御身ノ後生ヲモ助ラセ給ワムニ過タル善知識
ハ争力候ベキ。

e 残された都の親族及び自分の行く末への不安

其上都ニ渡セ給人々ノ御事ナドヲバ、誰ニユツリ、イカニナラ
セ給ヘトテ、カクハ思食立ニ力。ワラワモ老タル親ニモ立離レ、
幼キ子モモ振捨テ、只一人付マヒラセタル甲斐モ候ワズ。

『覚一本』においても、順序の差はあるが、小宰相の発言並びに
乳母子の女房の発言は全て記されている。ただ、例えば、夫に先立
たれた女房たちの名など、具体的なものは、『覚一本』では記されて
いない。また、「御身ひとつのこととおぼしめすべからず」は、『延
慶本』では、夫に死なれると云う境遇の同一性を指摘する言葉とし
て用いられているが、『覚一本』では、懐妊中の小宰相の身を記す
言葉となっている。しかし、ここまではほぼ異同はないと言っても
差し支えないであろう。

ところで、小宰相の発言にA～Dに対し、乳母子の女房の反論a
～eが、どれ一つをとつてもかみ合っていないことに驚かされる。
Aの出産の不安に対しては女房は全く答えず、cのようになんとか
して無事に出産せよと言っばかりである。Bの小宰相を待ち受ける
運命についても何もふれず、aのように同じ境遇の女性たちも身投
げなどしていないとか、bのように、たとえ死んで生まれ変わつて
も通盛に会えないという。Cで菩提を弔うよう依頼しているのに、
dでは出家を勧めている。強いて言えば、Dとeが、都に残る小宰

相の関係者の人々についてという点で、共通するが、それとてもかみあつてゐるとは言い難く、女房は、自分の親や娘の話にすり替へている。涙を流してかき口説き、身投げを止めようとする女房だが、その言葉は小宰相の不安や悩みを受けとめることなく通り過ぎ、小宰相がどんどんと冷静になつていく姿が、会話を使つて巧みに描かれていく。

さて、『寛一本』では、乳母子の女房の言葉を聞いて、小宰相がこの女房を説得できないことを悟り、すぐに誤魔化していくのに対し、『延慶本』では、このあと小宰相はもつ少し、言葉を費やす。

懐妊ノ身トナリテハ、死ヲサル事遠カラズナド云ナレバ、カヤウニ浪ノ上ニテアカシクラセバ、思カケヌ波風ニ逢テ、心ナラズ身ヲ徒ニナスタメシモ有ゾカシ。縦今度ヲ思延タリトモ、ワスル、時ハヨモアラジ。今ハナカナカ二見ソメメヘソメシ雲ノ上ノヨハノ契サヘクヤシクテ、彼ノ源氏ノ大将ノ臙月夜ノ内侍ノカミ、紅徽殿ノホソ殿モ、我身ノ上トオボユルゾ

ここでの、「紅徽殿」とは、「弘徽殿」のことであり、「源氏ノ大将ノ臙月夜ノ内侍ノカミ」の逢瀬とは、『源氏物語』の「花宴」において、源氏と臙月夜が、契り結び、そのために源氏にとつても臙月夜にとつてもつらい運命が待ち受けていることを引いている。

出会いがあつたために、つらい運命が待ち受けていたと、小宰相は

考え、こんなことなら逢わなければよかつたと嘆くのである。

小宰相の決心を止められないと不安に駆られた乳母子の女房は、身を投げるときは一緒にと懇願する。『延慶本』の方が、このあと、小宰相の誤魔化し方も複雑である。

是ハソレノ身ノ上ニ思ナシテモヲシハカリ給ヘ。別ノ道ノ悲サ、大方世ノウラメシサニ身ヲモ投バヤト云事ハ、世ノ常ノ事ゾカシ。サレバトテゲニハ争カ思モタツベキ。又適マ人界ノ生ヲ受タル者ニ、月日ノ光ヲダニモ見セズシテ失ワム事モ、カワユクモ有ゾカシ。

世のつらめしさに身投げしたいと思うのはよくあることだが、本当に身投げするわけではないと語り、お腹の子を生まれる前に死なせるのは可哀想だと言う小宰相は、これから自分がしようとしている入水自殺が、どのような結果を招くのかをしっかりと捉える冷静さを持つている。

そして、「三位ノ筆ニテ書給タリケル猿衣ノ有ケルヲ取出シテ、アワレナル所ヲヨミテ、忍ビ忍ビニ念仏ヲ申」といった、落ち着いた風情を見せ、乳母子の女房を安心させ、少しまどろんだ隙に、念仏を唱えつつ船端から海へと身を躍らせるのである。

さて、これまで『延慶本』を中心に、小宰相の身投げに至るまで場面を検討してきたが、そこには、語り本系には見られない平安朝

の物語の影がちらついている。例えば、今となつては通盛との出会いさえもが恨めしいという部分で、光源氏と朧月夜の君の出会いのようだと『源氏物語』を引き合いに出す部分があったり、「三位ノ筆ニテ書給タリケル猿衣」を読んで通盛を偲ぶという記述があるのがそれである。この「猿衣」は、草体の読み違いによる「狭衣」の誤写で、小宰相身投げの場面が、『狭衣物語』の影響を強く受けていることは、以前から指摘されてきたし、横井孝氏も「狭衣の筆跡を眺めつつ、思慕の思いに女が耐えきれずにいる構図は、小宰相の姿にぴつたりと重なってくるはず」と、述べておられる。

ただ、これらの王朝物語が、小宰相の行動とどのように結びついているのかは検討されず、単に「この章段に平安朝物語的の香気が濃い」といったようなまとめがされている。しかし、王朝物語の影がちらつけばちらつくほど、先ほど導入部で指摘した通り、何故小宰相が身投げをしたかについて、読む者により不審な思いを抱かせることになる。

ところが、ここに、『源氏物語』に登場するある人物を重ねると、小宰相の行動がより鮮明に浮かび上がってくるのである。

その人物は、浮舟である。まず、読み本系の諸本がほぼ同じ形で挙げた、通盛の正妻は宗盛の娘であるという記事だが、このために小宰相は皆と離れた別の船で生活することとなった。『源氏物語』

における浮舟も、薫に愛されるが、薫は正室女二の宮に遠慮する気持ちもあって、宇治の山里へ浮舟を隠してしまふ。

『更級日記』の中に、

浮舟の女君のやうに、山里に隠しすへられて、花、紅葉、月雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ。

と、作者が『源氏物語』を読んで、浮舟のような境遇にあこがれるという叙述があるが、宮中に仕える女房であった小宰相もまた、波の上で、「隠しすへられ」た自分の境遇を浮舟と重ねていたかも知れない。少なくとも、読み本系の諸本に於いては、小宰相が通盛の愛情を感じる環境を、北の方として愛され周囲に認められ子供も身ごもった幸せな形に描くことをせず、人から隠され、心細く、通盛の訪れだけを待つ形に描いている。

浮舟の姿を重ねれば、小宰相が、他の武将の妻とはことなり、身投げにこだわったのも、単に夫に先立たれた絶望からだけではなく、愛されたためであった。小宰相が身投げの前に女房に漏らした不安は、A 出産の危険性とB 再婚の可能性である。出産の危険性については、仮に十のうち九まで死ぬと言われていても、死ぬば通盛の後を追えるのであるし、出産で死ぬのが恐くて身投げするというのは

矛盾する。夫通盛の死に直面して、小宰相が動転しているための矛盾ともそれようが、その後、子供をこの世に出さずに死なせてしまつのは可哀想だと女房を安心させる小宰相の冷静さからすれば、出産への恐怖は身投げの理由とはならない。

小宰相は、生きながらえて、自分にはどうしようもない宿命のために再婚してしまう可能性を考えたとき、浮舟と同じ道をたどつたのではあるまいか。通盛を愛している自分が、思い通りにならない世の中で再婚し、亡き夫への愛と新しい夫との間で身つきがとれなくなることを考えたとき、小宰相の思いは、浮舟が、「ながらへば必ずつき事見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき」(『源氏物語』浮舟)と死を決意した叙述と重なる。浮舟が母親に手紙を残して世話係の右近にも黙って入水したように、小宰相もまた都への手紙を残し、女房に気づかれないように入水したのである。

『平家物語』のどの諸本にも、小宰相の身投げに関して、「昔より男にをくる、たぐひおほしといへども、さまをかふるは常のならひ、身をなぐるまでは有がたきためし也。忠臣は二君につかへず、貞女は二夫にまみえずとも、かやうの事をや申べき」(『大系本』巻九小宰相身投)といった叙述が見られる。夫に先立たれても出家し尼となれば、「二夫」に仕えることはない。この、一見不思議に見える作者の叙述も、『延慶本』に描かれたように、正妻に遠慮して別

の船で起居するところから、浮舟を下敷きとしてみた場合には、なら不思議ではない叙述となる。身を投げた小宰相を貞女の鏡のように描いているのは、生き残れば再婚しなくなった通盛以外の男性にまみえるかもしれない小宰相の将来の姿と、二人の男性の愛情の板挟みとなって死を選んだ浮舟の姿が、小宰相物語の作者の思考の中で重なつたためだとは考えられないだろうか。

おわりに

女性説話・王朝的物語等の挿話の問題は平家物語の成立論にとつても注目すべき点と思われる。本稿では『平家物語』における小宰相の入水を、『源氏物語』の影響という視点で検討してみた。浮舟と小宰相は、山里と船の上、川への入水と海への入水、助かつて出家と助からずに海へ水葬といった、対比的な形で描かれている。小宰相という人物が実在し、通盛の死の知らせを受けて入水自殺したのは事実であろうが、数ある戦場での悲劇の中で、ことさら『平家物語』が小宰相の入水を選んだのは、単に生きる意味を失つた人間の選択の一つを語るためだけではないといえるのではないだろうか。

『源平闘諍録』には、「源氏六十帖の中に、常に手馴したまひける巻物五六巻を取り、「海へ飛び入る小宰相が描かれている。渥美か

をる氏や松尾葦江氏によって、「王朝物語への憧憬を示す傾向」と指摘される。こうした叙述も、一方では小宰相物語の基盤に『源氏物語』があることを示しているとも考えられる。平安朝の物語を持ち、物語の中の女性の運命を自分の境遇と重ねながら、小宰相は、平安王朝に生きた女として夫の後を追ったのである。そしてまた、小宰相物語の作者にとっては、正室に遠慮し、身を隠されて暮らす様子だけでなく、「浮舟」の名そのものもまた、粗末な船上で通盛を待つ小宰相の姿と十分に重なり合うものだったのかも知れない。

注

- ① 本文の引用は、『平家物語(覚一本)』、『更級日記』は、『日本古典文学大系』岩波書店)、『延慶本平家物語』(勉誠社)、『源平闘争録』は内閣文庫蔵「講談社学術文庫」、『源氏物語』は『日本古典文学全集』小学館)による。
- ② 五采重著『高野聖』角川選書79
- ③ 富倉徳次郎著『平家物語全注釈』角川書店 巻第九の解説中(二〇二頁)に指摘有り。
- ④ 横井孝著『女人哀話考―小宰相と建礼門院と』、『平家物語 説話と語り』水原一編『有精堂』
- ⑤ ③参照。
- ⑥ 武久堅氏『平家物語発生考』おつふう社
- ⑦ 渥美かをる著『平家物語の基礎的研究』三省堂
- ⑧ 松尾葦江著『平家物語論究』明治書院